主日礼拝説教「生きるための信仰」予稿

日本基督教団石神井教会　2025年11月9日

【旧約聖書日課】創世記　15章1～18節a

1これらのことの後で、主の言葉が幻の中でアブラムに臨んだ。
「恐れるな、アブラムよ。
わたしはあなたの盾である。
あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。」
2アブラムは尋ねた。「わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか。わたしには子供がありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです。」3アブラムは言葉をついだ。「御覧のとおり、あなたはわたしに子孫を与えてくださいませんでしたから、家の僕が跡を継ぐことになっています。」
4見よ、主の言葉があった。
「その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。」
5主は彼を外に連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」
6アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。
7主は言われた。「わたしはあなたをカルデアのウルから導き出した主である。わたしはあなたにこの土地を与え、それを継がせる。」
8アブラムは尋ねた。「わが神、主よ。この土地をわたしが継ぐことを、何によって知ることができましょうか。」
9主は言われた。「三歳の雌牛と、三歳の雌山羊と、三歳の雄羊と、山鳩と、鳩の雛とをわたしのもとに持って来なさい。」
10アブラムはそれらのものをみな持って来て、真っ二つに切り裂き、それぞれを互いに向かい合わせて置いた。ただ、鳥は切り裂かなかった。11禿鷹がこれらの死体をねらって降りて来ると、アブラムは追い払った。
12日が沈みかけたころ、アブラムは深い眠りに襲われた。すると、恐ろしい大いなる暗黒が彼に臨んだ。13主はアブラムに言われた。
「よく覚えておくがよい。あなたの子孫は異邦の国で寄留者となり、四百年の間奴隷として仕え、苦しめられるであろう。14しかしわたしは、彼らが奴隷として仕えるその国民を裁く。その後、彼らは多くの財産を携えて脱出するであろう。15あなた自身は、長寿を全うして葬られ、安らかに先祖のもとに行く。16ここに戻って来るのは、四代目の者たちである。それまでは、アモリ人の罪が極みに達しないからである。」
17日が沈み、暗闇に覆われたころ、突然、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた。18その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。
「あなたの子孫にこの土地を与える。

【福音書日課】マルコによる福音書　12章18～27節

[18]復活はないと言っているサドカイ派の人々が、イエスのところへ来て尋ねた。[19]「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が死に、妻を後に残して子がない場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。[20]ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、跡継ぎを残さないで死にました。[21]次男がその女を妻にしましたが、跡継ぎを残さないで死に、三男も同様でした。[22]こうして、七人とも跡継ぎを残しませんでした。最後にその女も死にました。[23]復活の時、彼らが復活すると、その女はだれの妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」[24]イエスは言われた。「あなたたちは聖書も神の力も知らないから、そんな思い違いをしているのではないか。[25]死者の中から復活するときには、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ。[26]死者が復活することについては、モーセの書の『柴』の個所で、神がモーセにどう言われたか、読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。[27]神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。あなたたちは大変な思い違いをしている。」

星を数える【こども説教のために】

アブラム（＝アブラハム）は、75歳で「父の家」を出て、残りの人生を主（神）のお示しくださるところを目指して旅した人です。旅を始めたとき、妻サライ（＝サラ）はいましたが、子はいませんでした。ただ、甥のロトを連れて旅を始めました。また、たくさんの家畜を持っていましたから、家畜を飼う者たちを連れて行きました。家畜を飼う者たちも含めてアブラムの家のために仕える僕の筆頭には、ダマスコのエリエゼルを充てていました。

子のいなかったアブラムは、自分の家を甥のロトに継いでもらうつもりだったのでしょう。ところが、ロトは、自分の世話する家畜が多くなり、アブラムと一緒に旅することが難しくなりました。アブラムの家を出て、別れて別の道を行くことになったのです。そこで、アブラムは、自分の家をエリエゼルに継がせようと考えたのです。エリエゼルは、同じ家から生まれた家族ではありませんが、家のことをよく分かっていると思ったのでしょう。

ところが、ある夜、星空を見上げているアブラムに、主（神）が告げられました、「**あなたから生まれる者が跡を継ぐ**」と。「**あなたの子孫は、**星の数**のようになる**」と。本当に、アブラムには、85歳を過ぎてイシュマエルという子が、そして100歳でイサクという子が、与えられたのです。

主（神）の約束によって生まれた子が跡を継ぐ家が始まったのです。「アブラハムの子ら」の家です。主イエスは、わたしたち皆を、その家に新しく生まれさせてくださるのです。神の約束の家、神の家族の中に新しく生まれる子の一人ひとりとしてくださったのです。

生きている者の神

「週報」や掲示板に、一人の教会員の訃報をお載せしました。先月逝去され、ご家族身内のみで葬儀を執り行われたとのお知らせを、一週間前にいただいたのです。ご家族にキリスト者や教会に繋がりを持つ方が一人もありませんでしたが、幸いに、石神井教会の出身牧師が親しくされていた関係で、その牧師の司式でキリスト信仰に基づいた葬儀を執り行っていただくことになったようです。

20 年以上前、当時仕え始めたばかりの前任地教会で、ある教会員信者が亡くなられた際に、教会で葬儀が執り行われなかったことを責められたことがありました。亡くなられた方はご家族に信者はなく、ご家族の判断で仏式の葬儀を執り行われた後に教会に報告があったのです。それを知ったある方が、「信者が亡くなられたのに、教会で葬儀がされず、ましてや仏式で執り行われたなどということがあってはならない」と、厳しく責められたのです。

この 20 年で、世の中の葬儀や埋葬に対する考え方は大きく変化しました。20 年前に牧師を責めたあの方も、今は考え方が変わっているかもしれません。最近は、信者の方であっても、「教会での葬儀は不要」とおっしゃる方がいらっしゃいますし、実際には「葬儀に牧師の司式も不要」とお考えの方もあるようです。葬りの仕方で亡くなられた方の死後が左右されるわけではない、という考えが浸透しているのかもしれません。

それでも、ご自身の死後のことを心配される方はあるでしょう。現実的な問題として、ご自分が葬られる墓がどうなるのかと心配される方は少なくありません。もちろん、霊的な問題として、死後の裁きを心配される方もあるのです。終わりの日（終末）に、すべての者が神の御前に起き上がらされて（復活させられて）、最後の審判を下されるのならば、そのとき、自分はその裁きに耐えられるだろうか、という心配です。

多くの者は、そのようなことは考えないようにしているのかもしれません。真面目に考えれば考えるほど、自分は最後の裁きに耐えられないように思われてくるからです。自分の人生の中に非のない者などいないからです。主イエスの時代のユダヤ教の中には、**復活はないと言っているサドカイ派の人々**のような者たちがいました。終末の復活、つまり最後の審判はない、と考えれば、余計な心配などしなくて済むのです。そのほうが気楽です。けれども、だからと言って、わたしたちの非や過ちが無くなるわけではありません。

ただ、主イエスは言われるのです、「**神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ**」と。神は、最後の審判を控えて虎視眈々とされているようなお方ではなく、今生きている者をどうにかして生かそうとしてくださるお方なのだ、とおっしゃられるのです。

この家を継ぐのは…

再来週の日曜日、わたしたちの教会は、「オープンチャーチ」と称して、普段教会においでになる機会のない方々をお迎えしようとしています。6 年ぶりの開催です。以前の開催では、毎年盛況でしたが、この 6 年で社会も教会内も変化がありました。各戸へのポスティングは難しくなっています。SNS などを用いて宣伝することが当たり前になっていますが、結局のところ、おいでいただきたい方においでいただけるかは、迎える皆さん次第のところがあります。皆さん一人ひとりが、少しずつでも発信してくだされば、そこに案内は届くでしょう。多くの人を誘えなくても、一人が一人をお連れくだされば、結果的には多くの方に来ていただくことができるでしょう。

わたしたちは、教会堂の扉を大きく開き、わたしたちの心を大きく開いて、この地域で生活している人たちをお迎えしたいのです。教会で執り行われる葬儀においでくださって、わたしたちの信仰に触れてくださり、同じ信仰に入られる方もあります。それも貴いことです。それだけでなく、わたしたちは、日々の営みの中においでくださって、わたしたちの信仰に触れていただきたいのです。何よりも、**生きている者の神**となってくださるお方のもとに共に生きるという信仰に、触れていただきたいのです。

アブラハムに約束されたことは、「あなたの家を継ぐのは、あなたから生まれた者」ということでした。「あなたの家を継ぐ子らに、この地を与える」ということでした。

主イエスは、わたしたちを「アブラハムの子ら」として新しく生まれさせてくださったお方です。弟子たちから始まった教会は、主イエスによって新しく生まれさせていただいた者たちの家、アブラハムの子らの家、神の約束の子らの家、なのです。

この「神の約束の子らの家」を継ぐのは、ここで新しく生まれた者たちです。与えられたところで、この地上での人生を共にする者たちが共に生きる場所で、共に家を継ぎ、地を継ぐ者たちとして生きるようにされている。それが、アブラハムから受け継ぎ、主イエスによって世界中の者に受け継がれた、神のご計画です。終末に向けて進められているご計画です。終わりの日に完成されるはずのご計画です。

「**家を継ぐのはダマスコのエリエゼル**」ではありません。神の家でキリストと結ばれて新しく生まれ、神の家を継いできた、皆さんです。どこかの**エリエゼル**に任せるわけにはいきません。神の家で生まれた皆さんが、わたしたちが、神の家を受け継ぐのです。そして、この家で新たに生まれ、共に生きるようになるはずの方々を迎え入れるのです。神の家は、「**あなた**がた**から生まれる者が跡を継ぐ**」のです。